

横浜市の動向

1 2025 年5月 山下公園通り周辺地区まちづくりビジョン(素案)

(1) ビジョン策定の目的と背景(抜粋)

山下公園通り周辺地区は、横浜港開港以来、横浜の経済・文化の中心地として発展してきたエリアです。美しい海や緑、歴史的建築物、銀杏並木などの景観が特徴で、多くの来街者を魅了する横浜の顔ともいえる地区です。しかし、築 40 年以上の建物が多く、低未利用地も点在しており、既存施設や土地の更新時期を迎えています。

この機会を捉え、持続可能なまちづくりを実現するため、地区の未来を見据えたビジョンを策定します。市民、地域団体、事業者などと共有し、あらゆる主体と協力して取り組みを推進し、より魅力的で活気ある地区として発展させることを目指します。

このビジョンは、横浜市の都市計画マスタープランや中期計画などの上位計画を踏まえ、地区の将来像やまちづくりの方向性を示すものです。

(2) 山下公園通り周辺地区まちづくりビジョン対象範囲



(3) 地区の将来像とまちづくりの方向性

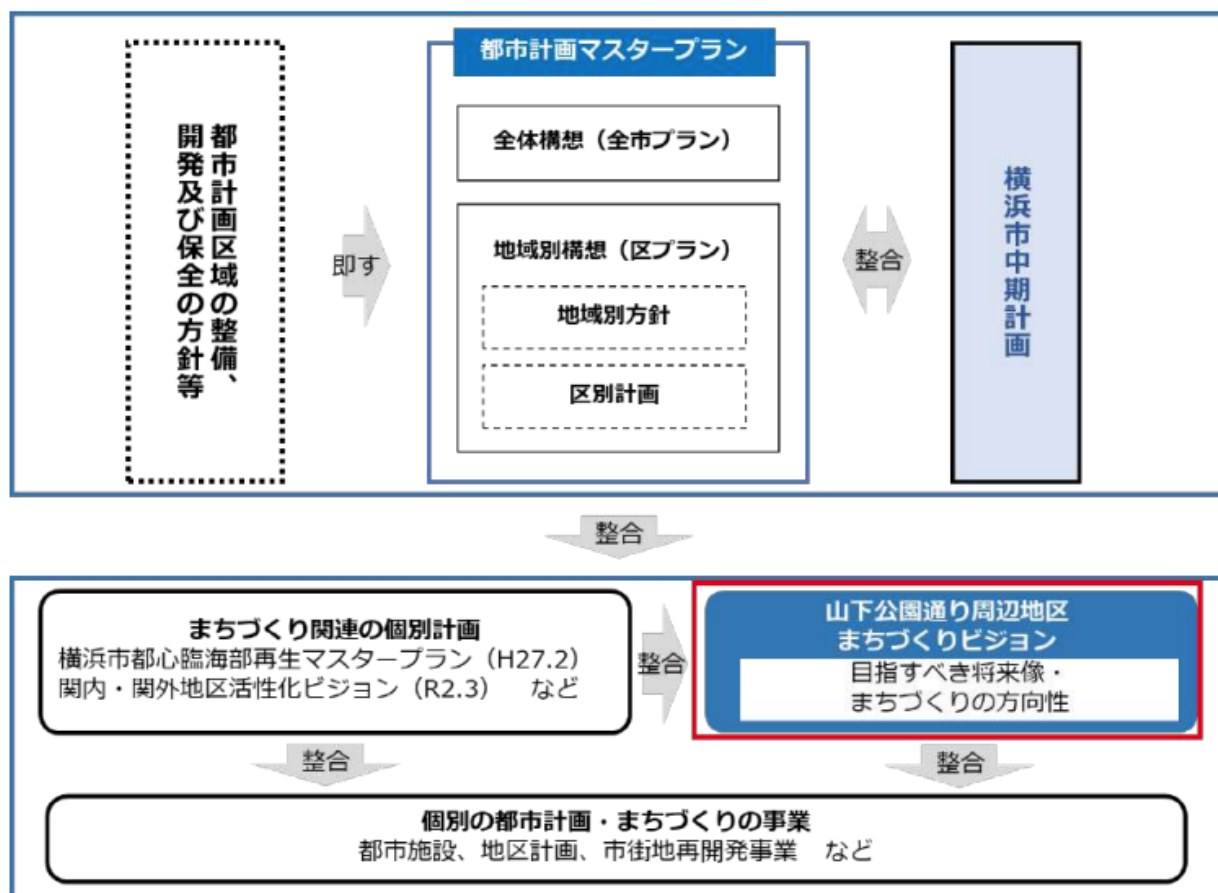
地区の歴史・現状	
【歴史】	・開港に伴い外国人居留地が形成され、その歴史や背景がまちの個性になっている
【立地特性】	・関内・関外地区と山下ふ頭の結節点、緑の軸線上に位置 ・水際線の一部を形成する重要な地区、羽田空港等へのアクセスに恵まれた地区
【街並み・景観】	・周辺には魅力的な観光スポットが集積 ・横浜らしい歴史を色濃く残した街並み
【建物現況】	・銀杏並木が連続する山下公園通り、海や緑を身近に感じられる山下公園に近接 ・落ち着いた雰囲気を感じられる水町通り
【交通インフラ】	・文化、宿泊、観光施設、公共施設が集積 ・築40年以上の老朽化した施設が点在、共同住宅の増加
【防災】	・多様な交通モードが集積 ・首都高速道路の出入り口に近接 ・津波、高潮による浸水区域、液状化危険度が高い区域

特性	課題
・横浜独自の魅力を有する水際線の結節点に位置 ・歴史性が根付く街並み ・海や緑を身近に感じる立地環境 ・多様な人々や文化を受け入れ発展してきたまち ・羽田空港や客船ターミナルなど、国内外から人々が訪れやすい立地	・施設の老朽化や低未利用地の増加 ・地区のにぎわいが低下傾向 ・歩道空間が十分確保できていない区間がある ・交通機能・乗降環境充実の必要性 ・夜間が暗い印象を受ける ・災害への対応



地区の将来像
港町の歴史、美しい海や緑、新たな魅力とにぎわいが織りなす 水際線のまちづくりにより、世界の人々を魅了するまち
まちづくりの方向性
①横浜の水際線の魅力を活かしたまちづくり ②今ある海辺と緑の風景と連動させた新たな GREEN 空間の創出 ③国内外から人や企業を惹きつける多彩な機能の導入 ④来街者を迎え入れる結節点としての機能強化 ⑤環境に配慮した持続可能なまちづくり ⑥災害に強いまちづくり

(4) ビジョンの位置づけ



(5) 山下公園通り周辺地区まちづくりビジョン(素案) 県民ホールの再整備に特に関連する項目

4. 地区の将来像とまちづくりの方向性

③ 国内外から人や企業を惹きつける多彩な機能の導入

■世界水準のエンターテインメントに触れられる場の創出

- ・ 音楽ライブや映画祭など、来街者がいつ訪れても楽しめる体験の場を提供。
- ・ オペラやバレエなどの舞台芸術を上演できる施設を整備。
- ・ 市民が文化芸術を身近に体験・表現できる場を設け、将来の人材育成や豊かなライフスタイルの実現を目指す。

④ 来街者を迎え入れる結節点としての機能強化

■多様な人々が集い・交流できる空間の創出

- ・ 来街者を迎え入れるゲートとして、開港の歴史やにぎわいを感じられ、多くの来街者が憩い交流できる開放的な広場空間を創出。

2 横浜市福祉のまちづくり条例及び施行規則及び施設整備マニュアル

- ・ 福祉のまちづくり条例施行規則を改正し、令和7年6月1日に施行
バリアフリー法施行令の一部改正により、「便所」、「駐車場」及び「劇場等の客席」の基準が改正された。改正後の施行令基準が福祉のまちづくり条例施行規則の基準を一部上回ることから整合を図るため施行規則の一部を改正した。令和7年6月1日より施行
- ・ 横浜市福祉のまちづくり条例施設整備マニュアル(建築物編)の改正
福祉のまちづくり条例施行規則を改正に合わせ、施設整備マニュアルが改正された。マニュアルでは、「移動等円滑化経路」「駐車場」「廊下等」などの19の整備項目について指定施設整備基準が示されている。

3 「横浜未来の文化ビジョン(仮称)」骨子案

(1) 概要

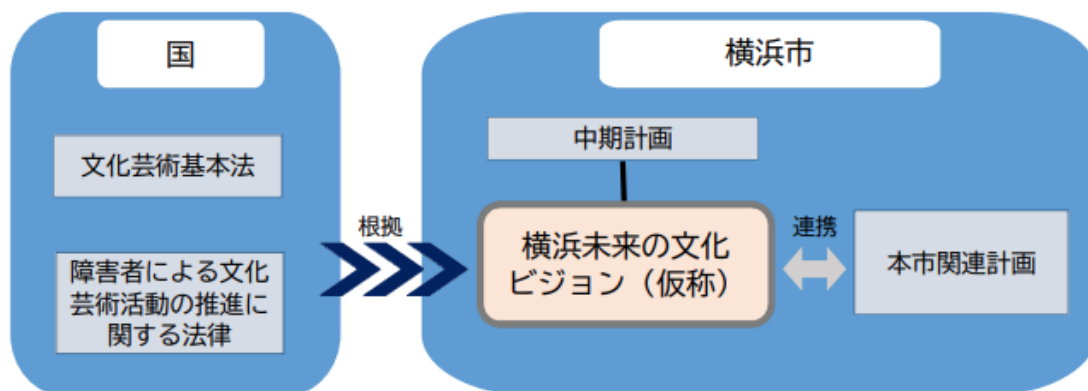
横浜市は2012年に「横浜市文化芸術創造都市施策の基本的な考え方」を策定し、文化政策を推進してきた。

策定から13年が経過したことを踏まえ、これまでの成果と課題、文化の現状、環境の変化を整理し、「10年後の横浜の文化の将来像」を『横浜未来の文化ビジョン(仮称)』として描くこととした。このビジョンにより、文化施策の目指す方向性を明確化し、事業手法を再構築することで、市民が文化的豊かさを実感できるようにすることを目的としている。

(2) 策定の予定

時期	内容
令和7年6月	骨子案策定
令和7年12月	素案策定
令和8年1月	パブリックコメント実施
令和8年3月	原案策定

(3) ビジョンの位置づけ



(4) 「横浜未来の文化ビジョン(仮称)」骨子案(令和7年6月公表)より抜粋

横浜の持つ強みを生かした「『横浜文化』の創造」を基本的な方向性として、4つのビジョンの実現につなげます。

ビジョン1:誰もが自分の夢に向かって進めるまち

すべての市民が希望に応じて文化的な活動ができる

ビジョン2:ウェルビーイング(幸福)を実感できるまち

身近な地域に、心身の健康増進の場があり、文化による地域コミュニティが市全域で形成されている。

ビジョン3:サステナブル・シフトの文化が根付くまち

文化活動において、DX や脱炭素社会の推進をクリエイティブに目指し、持続可能性を高めている

ビジョン4:いたるところに文化が息づくまち

街なかや企業活動、イベント等、様々な場面に文化が息づき、にぎわいくくりや経済・観光振興につながっている